ホルモン
チエちゃん
ぶっ
ぶっ
ぶっ
ぶっ
ホルモン
ばくだん
清酒
ホルモン
じゃりン子チエ
長編アニメーション映画
東宝

じゃりン子チエのかわいいマスコットや
ぬいぐるみがあんぜんいから新発売!!
ミニマスコット
各¥250
チエちゃん
ひらめちゃん
小鉄
アントニオJr.
布帛マスコット
各¥380
ホルモ
ワシの ぬいぐるみを 買いに行くんじゃ
こら〜 どこへ 行くんじゃ〜
アントニオJr.
小鉄
ソフトバンク
各¥500
ぬいぐるみ (中)
各¥2,800
ぬいぐるみ(大)
各¥3,980
チエちゃんやひらめちゃんの人形も発売されます。
株式会社 あんぜんい
〒131 東京都墨田区向島5-13-5
TEL 03(625)8680(代表)
©双葉社・はるき悦巳

第26回小学館漫画賞受賞

原作■はるき悦巳

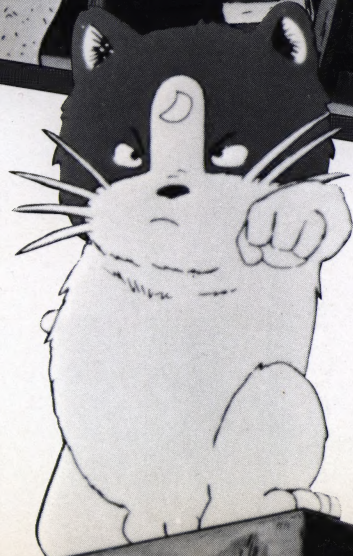
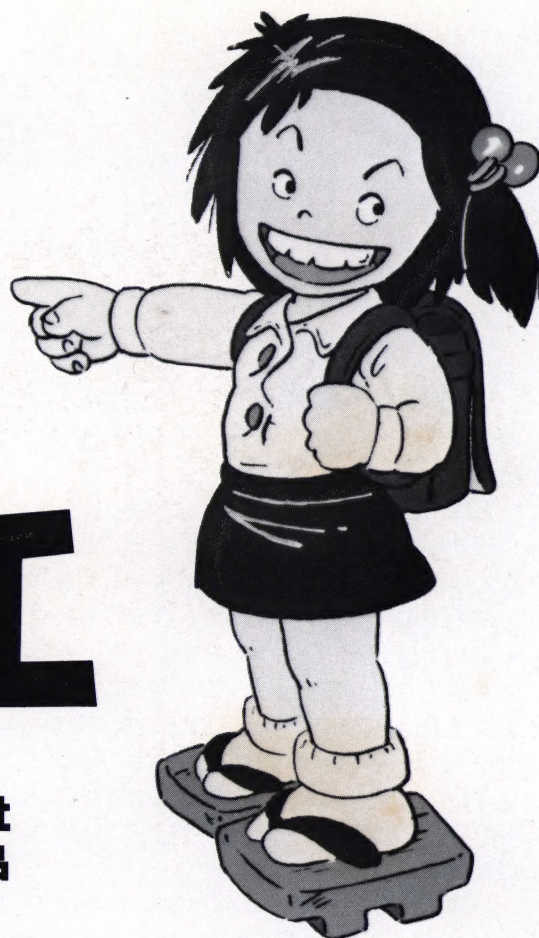
「週刊漫画アクション」連載
双葉社刊

監督■高畑　勲

主題歌■ビジー・フォー（CBSソニー）

じゃりン子チエ

東宝●キティ・ミュージック●東京ムービー新社
提携作品

ウチは

解 説

メチャメチャおもしろくて、心がスッゴク暖まる——「じゃりン子チエ」はそういうアニメ！

'80年末映画・TV11社によって壮烈な争奪戦が繰り広げられた「じゃりン子チエ」。その魅力はどこにあるのだろうか。まずいえることはチエ・テツ・小鉄をはじめとする登場人物のキャラクターの類いまれなおかしさ。そして関西弁でたくみに語られる、笑いに包まれた叙情豊かなストーリー。これらの魅力が井上ひさし氏・大岡昇平氏の絶讃を生み、単行本400万部突破という驚異的売上げを呼び、ひいては年末の映画・TV各社による争奪合戦を引き起こしたのである。

今回のアニメ化にあたっては声の出演にこれ以上はないという豪華適役が配役された。主人公のチエに中山千夏、そして〝やすし・きよし〟〝のりお・よしお〟〝紳助・竜介〟〝ザ・ぼんち〟ほか、空前の漫才ブームの頂点に立つ人気者たちが、「MANZAI　アニメスペシャル」と呼ぶにふさわしいほど大挙出演してアニメ「じゃりン子チエ」の魅力を倍化させている。

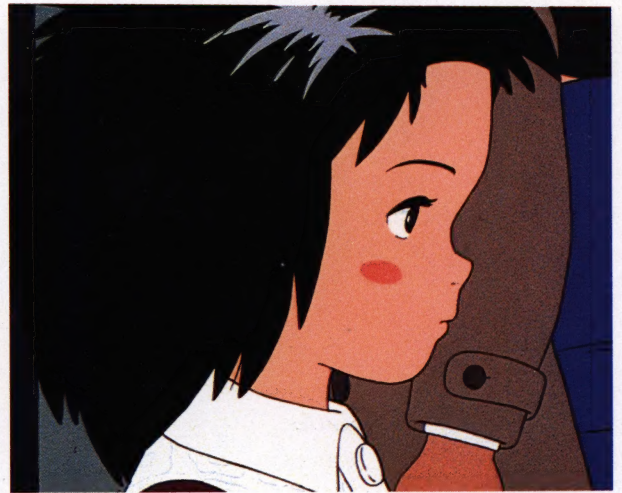
監督・高畑勲、作画監督・小田部羊一、大塚康生といった現在の日本アニメ界を代表するスタッフが製作を担当し、音楽をハッピーでおキラクなステージをハイテクニックなコーラスと演奏で支え、'81年最も注目されるグループ「ビジー・フォー」が受け持つ。

チエ

小学生ながら、一人でホルモン焼き屋を切りもっているガンバリっ子。父・テツと母・ヨシ江の間を何とかしようと努力している。大人顔負けのしんらつな言葉も口にするが、包容力もあって、オッサン連中にもてている。めちゃくちゃ脚が早いし、手も早い。頭のポッチリがチャーム・ポイント。得意技はゲタでドツクこと。

スタッフ

製　作	多賀英典
	片山哲生
原　作	はるき悦巳
	「週刊漫画アクション」連載　双葉社刊
脚　本	城山昇
監　督	高畑勲
作画監督	小田部羊一
	大塚康生
美　術	山本二三
撮　影	高橋宏固
録　音	加藤敏
編　集	鶴渕允寿
助監督	三家本泰美

日本一すすんでる少女やねん!

チエのひとり言

「ウチは日本一不幸な少女や」
「ウチは働いとるんや、
宿題やってるヒマなんかあるかい」
「生活設計て知ってるか、
ウチいまそれをやってるねん」
「あかん、一人になって考えよ。
ウチは生活力には自信があるんや」

「子供が親の仕事さがしてるねん。
みじめな少女や」
「あの親や、今からきっちり貯金しとかんと」
「ウチがお嫁に行ったら、
テツどうして生きてくんやろ。
ウチ、不安……」

「ウチは傷つきやすい少女や」
「でもウチはいつも元気や。
元気やないと生きて行けんもん」
「あかん、明日考えよ。
明日になったら元気が出る。
明日はまた
明日の太陽がピカピカやねん」

〈テツ〉

チエの父親。バクチとケンカが何より好きな中年ガキ大将。常識にはトンと縁がないが、憎めない人柄が皆の心をひきつける。チエを可愛いがり、ヨシ江はんに屈折した愛情を抱いている。意外とテレ屋で、酒は全くダメ。

〈ミツル〉

テツの幼なじみで、駐在所の巡査。何かとテツのことをかばうのだが、なかなか改心しないテツに心を痛めている。

〈社長〉

バクチ場遊興倶楽部の社長。妻と娘に逃げられて以来猫のアントニオを猫かわいがりしていたが、アントニオの死後、気が弱くなって足を洗いお好み焼屋を開く。善人だが酒が一升を超えると人が変わり凶暴になる。

〈ヨシ江〉

美人でやさしいチエの母。一時の迷いで家を出てしまったが、チエのことを心から気づかっている。一見黙って耐えるタイプだが、脚はテツより速く、ここ一番という時の体力は十分。とぼけた所もあり、意外にテツをしっかりおさえている。

〈おジィ〉

気の弱いテツの父親。何度だまされてもテツを信じては、お金をだましとられている。人は良いのだが、実はテツを恐がっているのかもしれない。おかげで、チエにもオバアにも頭が上らない。

〈おバア〉

本気になるとテツより強いテツの母。不出来な息子を恥ずかしく思っているが、そこは母子、似た所も多い。チエの強い味方で、ブレーンバスターを得意技にしている。

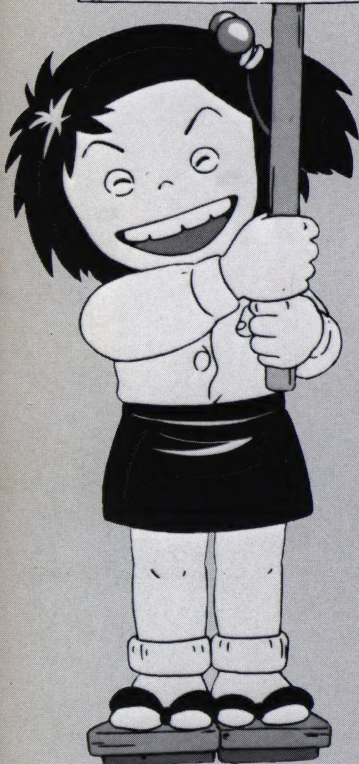
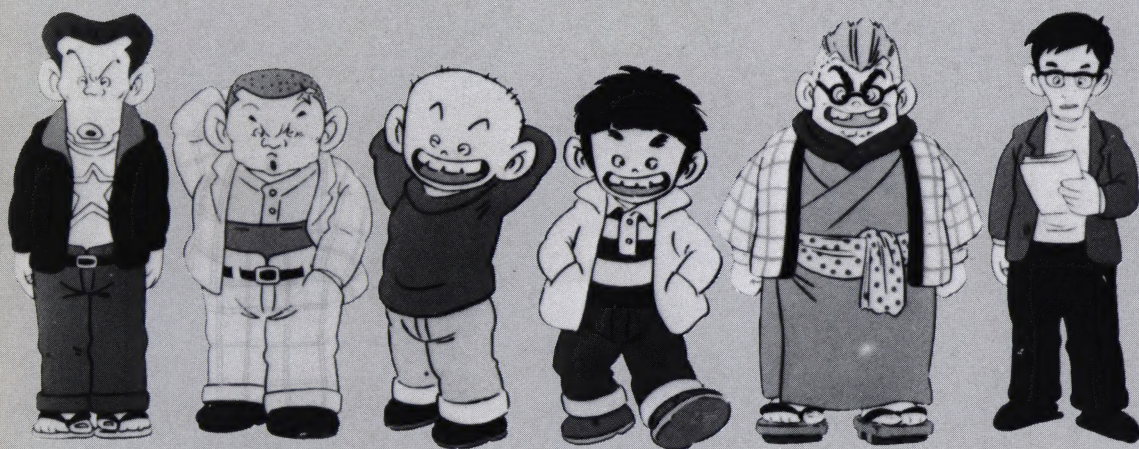
〈テツの仲間〉

テツがヒマをもてあましている時はいつもそばにいる。何かあるたびにテツの応援にかけつける気のいい連中だが、賭けごとではいつもテツのイカサマにやられている。

〈アントニオ・ジュニア〉

〝牛殺しのアントニオ〟の息子。父の仇を打とうと小鉄と決闘するが、小鉄の心意気にうたれて親友となる。お好み焼屋の社長の寵愛を受ける。少し気障なところがある。得意技は頭突き。

〈小鉄〉

チエの用心棒の猫。普段は猫をかぶっているが、その強さはテツ以上。〝必殺タマつぶし〟の他得意技も多い。ソロバンをはじき、芸術も理解する。裏街道を歩む猫の間では名前の知られた大物の一匹猫らしいが正体は謎。

登場人物や チエをめぐる 仲間たち

〈花井渉〉
チエの担任の先生で花井拳骨の息子。チエに暖い目を注いでいる。好青年だが父・拳骨とは対照的に少し気が弱く、体力もない点が、拳骨にはいささか不満でもある。

〈花井拳骨〉
花井先生の父親。テツの恩師でありテツとヨシ江の仲人もつとめた。テツには徹底的に強い豪放な人物で、漢詩の研究者としても一流の学者。テツを可愛いがっているが、いじめることにもひそかな喜びを感じている。

〈マサル〉
チエのクラスメートのガリ勉っ子。チエの悪口をいうことに生きがいを感じていて、悪口ノートをいっぱいつけている。体力ゼロで、チエに手ひどい逆襲をくらってばかりいる。

〈シゲオ〉
マサルの腰巾着でいつもマサルにくっついている。マサルのチエへの悪口がぴたっと決まると無上の幸せを感じる変な小学生。少し間が抜けている。

〈カルメラ兄弟〉
アマチュア・ヤクザでカルメラ焼屋をしている。兄貴分はもとキック・ボクサー。しょっちゅうテツにどつかれているが、テツのいい仲間である。

物語

通天閣の見える街に住むチエはバイタリティーのかたまりのような女の子だ。バクチとケンカが何より好きな父・テツにかわって、小学五年生の身で家業のホルモン焼き屋を一人で切り盛りしている。おまけにへそくりまでする程しっかりしている。「ウチは日本一不幸な少女や」と口ではいいながら、元気いっぱい生きている。

テツの両親のおバァやおジィは、いつもテツをまともにしようとするのだが、なかなかうまくいかない。気の弱いおジィをだまして店の金をゴマカシて、おかげでおバァに得意のブレーンバスターをかけられても、テツはめげずに遊びまわっている。たまたまチエの家に居ついた猫の小鉄でさえ、テツには呆れ返ってしまう程だ。

そんなテツでも、チエのことだけはしっかり可愛いがっている。父兄参観の日、学校に現われたテツは、チエを激励する余り、先生を脅迫する始末。子の心親知らず！先生は恐わくて、チエは恥ずかしくて、ワッと泣き出してしまった。

チエの母・ヨシ江は、テツと別れて暮らしている。チエはテツには内緒で時々母と会っていた。何より楽しいこの〝秘密のデート〟の一日も、別れの時間が来るとチエの胸にさびしさがこみ上げてくる。チエの本当の願いは両親が一緒に暮らす家なのだ。だが、今のテツの状態ではとてもお母はんに戻ってもらう訳にはいかない。テツを改心させてまともに仕事につかせなければ……。

ある日チエの店におかしな一団がやって来た。遊興倶楽部の社長とその手下で、テツのバクチの借金をとり立てに来たのだ。テツを待つ間に、社長は愛猫〝牛殺しのアントニオ〟を小鉄にけしかけた！だが小鉄は強かった。「必殺タマつぶし」をかけられたアントニオはあえなくダウンしてしまった。

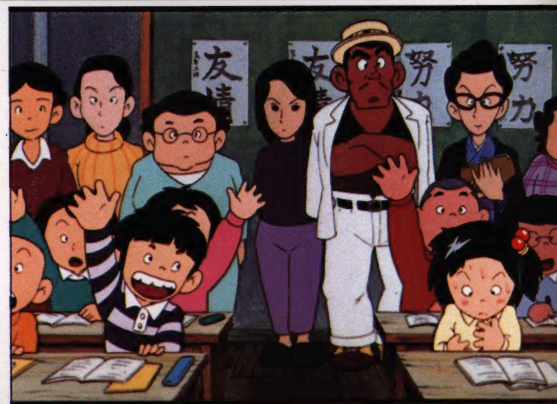
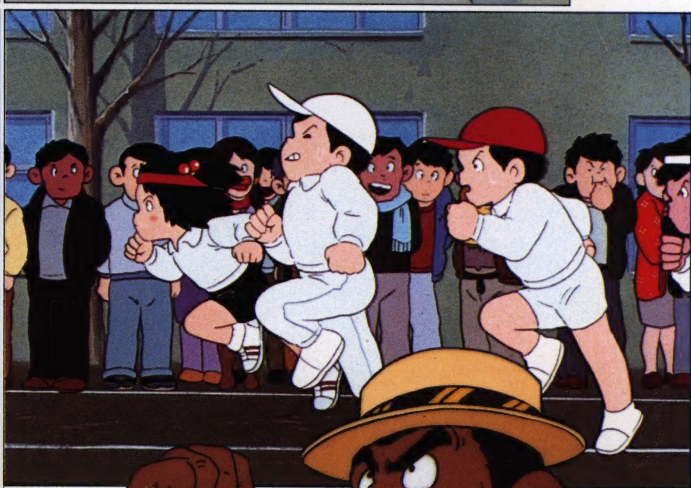
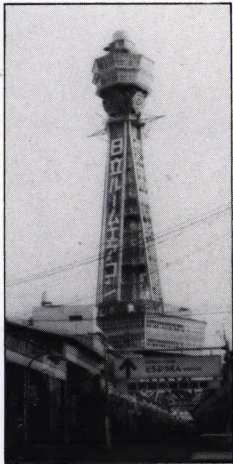
テツの就職先が決まった。アントニオに死なれて気弱になった社長が、バクチ屋から足を洗って開いたお好み焼屋の用心棒に雇ってくれたのだ。だが、縁日の日、テツはヨシ江と会っているチエを見てしまった。「ワシこんなに可愛がってるのに……」すねたテツはお好み焼屋へ居候を決め込んだり、運動靴をプレゼントしたりとチエの気をひこうとあの手この手。

マラソン大会の日、仲間をひきつれて応援に来たテツののぼりには「親一人子一人の根性を見せたれ！」ヨシ江への対抗意識が燃えている。去年ゲタばきで三位のチエは、最初からスパート、人間離れした速さで見事優勝する。

ヨシ江が帰る日がやって来た。テツとヨシ江の仲人をした花井拳骨が、有無を云わせず、家に戻したのだ。拳骨はチエの担任花井先生の父親でテツの小学校時代の恩師だ。拳骨に頭の上らないテツはシブシブヨシ江の戻るのを認めたが、内心面白くない。それを察した拳骨はチエとヨシ江とテツの三人を遊園地へ遊びに行かせた。チエは両親を何とか打ちとけさせようとワザと大ハシャギをして奮闘する。帰り路、テツとヨシ江は少しずつ言葉を交わし合っていた……。

風の強い夜、一匹の猫がお好み焼屋に現われた。死んだアントニオの息子アントニオ・ジュニアだ。ジュニアは父の仇と小鉄に決闘を申し込むが、チエや社長の心中を察した小鉄は無抵抗でジュニアの猛攻に身をさらす。小鉄の男気（？）にうたれたジュニアは、いきがかりを捨て小鉄の親友になった。

新しい仲間を加えて、チエは今日も元気いっぱいホルモンを焼いている。

宝焼酎
一級酒
二級酒

"じゃりン子チエ"の背景

大阪のシンボル 通天閣 ▶

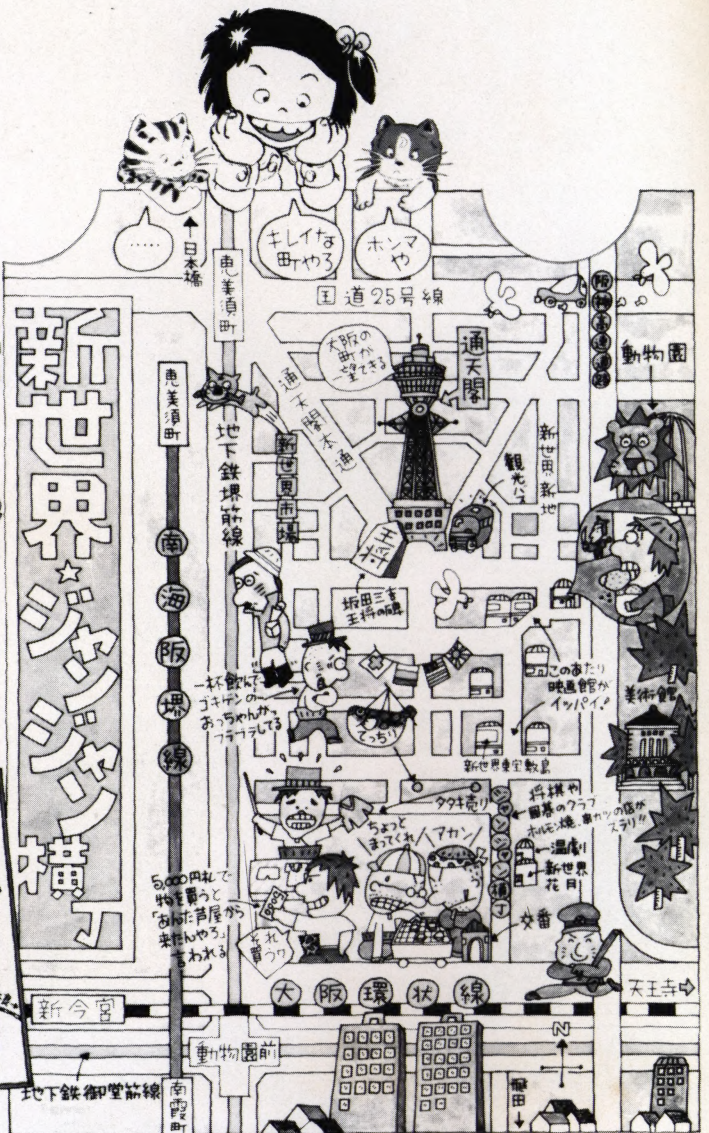
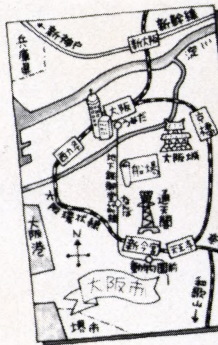
「じゃリン子チエ」では，大阪の町が大きな役割を果たしている。風景はもとより，人情，食べ物，大阪弁，そして底に流れる物の考え方や生活感覚のすべてが，独特の大阪的なテンポとムードを作り出している。

大阪弁に「もっちゃりしている」という言葉がある。不粋，野暮くさい，パッとしないなどの意味である。江戸・東京が「粋」ならば，大阪は「野暮」を文化の根本においているのではないかと思う。

地名からしてそうである。松屋町（まっちゃまち）とか道修町（どしょうまち）など有名な問屋街だが，原宿，六本木は言うに及ばず，人形町や小伝馬町といった東京の地名に比べてなんともっちゃりしていることか。繊維町であった丼池（どぶいけ）など，知らない人が聞いたら，メタンガス漂うドブダメのまん中にでもあるのかと思うに違いない。

大阪人が二人寄ると漫才になるとは，よく言われる言葉だが，大阪漫才とは要するに相手のけなし合いであり，いかに巧妙に的を射た悪口を言うか，である。これは全く粋ではない。「じゃリン子チエ」でもチエや，小鉄やおバアはんは実に悪口がうまい。大阪弁とは，人をののしるレトリックが，異常に発達した言葉なのだ。

大阪は食いだおれの町でもある。しかし，大阪名物といえば，まむし（うなぎ丼）やてっちり（ふぐちり）はやや高級イメージだが，たいがいはきつねうどん，お好み焼，タコ焼といった，実に庶民的な食べ物ばかりなのである。チエちゃんの営むホルモン屋はその筆頭で，大阪弁で捨てることをホルということから，牛や豚の内臓にタレをつけて焼いて食べるのを，もともとほる物だったという意味でホルモン焼というようになった。

大阪の町は，はっきリ言ってきちゃない。緑は少ないし，ゴミゴミしている。一説には日本でいちばん道にツバを吐く人間の多いのが大阪だとまで言われている。でも，そんな町だからこそ，見栄や気取りのない，ホンネの人間関係が生まれるのかもしれない。テツやチエちゃんをはじめとする「じゃりン子チエ」の登場人物たちがみんな，バイタリティーいっぱいに生き生きしているのは，大阪が舞台だからこそだと思えてくるのだ。

チエの住む街 通天閣界隈ルポ

大阪の下町のムードを活写してみせたはるき悦巳の「じゃリン子チエ」は大阪のまんがファンを狂喜させた。あちこちで「これが大阪や！」という歓喜の声が聞かれたような気がする。はるき悦巳自身は「僕が中一までおった頃の感じで描いてるから，二十年近く前。せやから今の感じで受けとんのがわからへんけどね」と語っているが，案ずることはない。大阪は，表側こそ多少小ぎれいになったが，実は今でもそのまんまなのである。

チエが住むのは通天閣が見える町。原作には地名は出て来ないが，通っているのが西萩小学校という架空の学校だから，萩之茶屋付近だろうと見当をつけて出かけてみる。あいりん労働者センターの裏にある小学校がモデルだろうか。正門前の路上では露店が店びらきし，テツみたいな，実にヒマそうなオッサンがブラブラしている。下校時ともなると，

▲出たあ〜、ホルモンや！

これが根性の大阪猫！▶

チエやマサルみたいなガキ…いや子どもたちが元気よく飛び出してくる。生産性とか経済成長とかいうものとは全く無縁なくせに，活気だけは,うれしいくらいに満ちあふれた町だ。

国鉄・新今宮の駅前へ出てみる。広い通りに面してホルモン屋や大衆食堂が軒を並べる。夕方からが稼ぎ時なのだろうか，昼でも結構客が入っている。露町のガード下で一匹の猫を見つけた。なかなかカメラの方を向いてくれない。不愛想な猫だ。ガードの柱には労働者学習会のビラにはさまれて「じゃりン子チエ」のポスターが貼られていた。

▲この雰囲気がこの町の特色

これがチエとヨシ江はんのデートの現場や！▶

◀信じられないようなこの映画のタイトル!!

通天閣下の歓楽街・新世界の入り口，ジャンジャン横町へと向かう。道路をはさんだ向い側，元遊郭だった飛田本通の入り口に「チエちゃん」そっくりのホルモン焼屋をみつけてパチリ。新世界には10館以上の映画館がある。年末には必ず「忠臣蔵」をやる映画館があったり，この日も「鞍馬天狗大会」をやっていたり，映画ファンにはうれしい映画街だ。アニメなどはたいがいすぐ打ち切られてしまうのだが,「チエ」だけはきっと例外だろう。

新世界を通りぬけて東側の天王寺公園へ。動物園や美術館のある，大阪には珍しい緑地帯だが，この公園内にある茶臼山という小高い丘が，どうやらテツとヨシ江さんが別居解消の話し合いのためのご対面をした舞台らしいのだ。原作より木が多いが，感じは似ている。石段を登って茶臼山のてっぺんに立ち，ふと下を見ると，小さな池がありボートが浮かんでいる。「わっ，チエとお母はんデーがトした池や！」石段を降りていくと，目の前にくずれかけた石垣。「ひょっとしたら…」石垣の横の階段を上ってみると墓石がニューッと現れた。「わっ，わっ，小鉄とジュニアが決闘した墓地やーっ！」

日が傾き，通天閣に灯りがともった。この町では，いまもいろんな，チエやテツや，社長やヨシ江さんや，おジィやおバァや，マサルやシゲオやヒラメちゃんや，小鉄やアントニオJr.が生きて，暮らしているに違いない。そんな気がした。

（アクセント符号：平板な場合「—」、途中からさがる場合「—＼」、途中からあがる場合「＼—」）

———
アカン（句）
駄目だ、失敗だ、いけないなどの意。アカヘンとも言う。アカヌのなまり。間投詞、感嘆詞として軽い絶望を表すために用いることも多い。チエがテツの行動を見て発するのは主にこの場合。

———
イキル（動）
きおい立つ。元気づく。「生きる」ではない。「何いきってんねん」のように相手がムキになるのをいなす場合は、軽い蔑りを含む。

—＼＼
エライ〔偉い〕（形・副）
大変。ひどく。どうも。どうにでも使える便利な言葉。「えらいすんまへん」といってても「どうも、どうも」と言っているようなもので深い意味はない。「エライやっちゃ」というと、偉いとほめているのではなく、あきれていることになる。

————
カルメラ（名・外）
ざらめを水で煮て練り、重曹を加えてふくらませた菓子。カルメ焼ともいう。

—＼＼
ケッタイ（形動）
妙な、変な、おかしな、奇態な、いやな、不思議な等、いろいろの意味を含んだ実にケッタイな言葉。とにかくわけのわからないものは「けったいやなあ」と言っておけばまちがいない。一種の判断停止である。

—＼＼
スカン〔好かん〕（句）
好かない。嫌いだ。いやだ。「嫌い！」と露骨に言わず「好かん！」とえん曲に言うのが大阪弁。良くいえばやわらかいし、悪くいえばモッチャリしている。

———
チビル〔禿びる〕（動）
①すり切れる。磨滅する。②出し惜しみする。③小便などをしくじり洩らす。ヤクザがお好み焼屋でチビったのは「など」の方。

———
ドツク（動）
打つ。なぐる。胴突くのなまりか。ドヤス、ドヅクとも言う。なんとなくドヅクの方が、エゲツナそうである。シバク、イテマウ、イワス等、この手の語彙は豊富。

———
ヌカス〔吐かす〕（動）
言う。ほざく。「何ぬかすねん」とはつまり「何とおっしゃるウサギさん」ということ、売り言葉に買い言葉である。

—＼
バイ〔貝〕（名）
ベーゴマのこと。バイとはタニシに似た貝で、そのカラにロウをつめたものをコマのように回して遊ぶもの。これをバイゴマ、略してバイという。

———
ビビル（動）
ためらう。気おくれする。こわがる。小さく震える。語感そのままの意味である。びびる奴のことはビビリという。

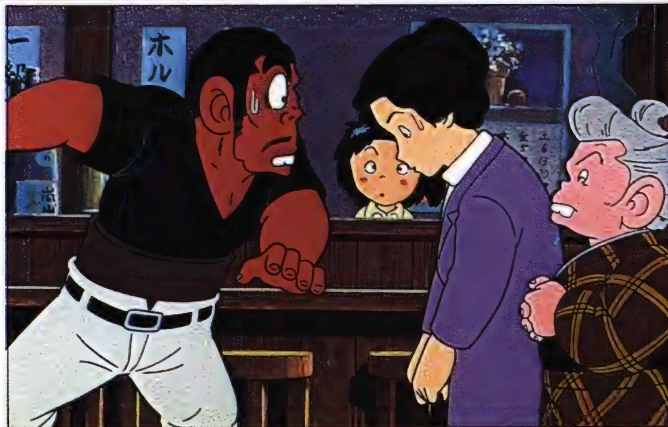
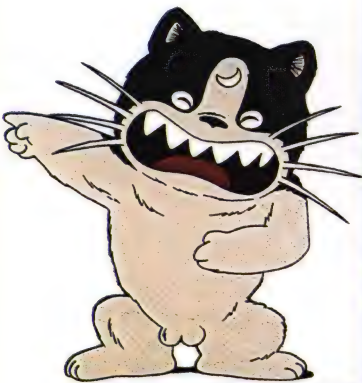
＼——
ベッタン（名）
メンコ。野球選手、映画スター、テレビ・マンガのキャラクターを印刷したボール紙のカードを地面に置いて、交互に打ち当て、裏返ったものを取って勝とする遊び。地面に当てる時の音からベッタンの呼名がついた。

————
ホタエル（動）
戯れる。ふざけ騒ぐ。おどけるというのはイチビルの方が近い。ホタエルはもっと無自覚。テツのやることはすべて、チエにはほたえてるとしか映らない。

—＼—＼
ボチボチ（副）
徐々に。少しずつ。ゆっくり。「ボチボチ行こか」と言えば、「まあ、ゆっくりしようや」と「そろそろ行こうか」の両方の意を含む。世の中、「まあ、ボチボチ」と言ってるうちになんとかなるものである。

（参考資料「大阪ことば事典」牧村史陽編・講談社刊）

開運

ホル

作者とチエと私と

中山千夏

　声優、という言葉はある。ラジオやら外国映画の吹き換えやらを主にしている俳優のことだ。では、声優のする仕事を一口で言い表わせる言葉――となると、これが無い。
「声の仕事」と私は言い習わしてきた。
　芸能人としていろいろなことをやってきたけれど、なかでも私は「声の仕事」が好きだ。肉体の制約が無いぶんだけ、様々に化けられて楽しい。うんと若くもなれるし年寄りにもなれる。男の子にも絶世の美女にもなれる。
　事実、10年ほど前に、私は『クレオパトラ』を演じた。手塚治虫さんのアニメーション映画だった。アニメーションというものが無かったら、エリザベス・テーラーのやった役を演じるなんてことは、一生なかったろう。
　10年ぶりに吹き換えの仕事をした。よく誤解されるので言っておきたいのだが、その間、「声の仕事」をやめていたわけではない。誰も仕事をくれなかっただけだ。
私は『じゃりン子チエ』を知らなかった。仕事がきたので読んでみた。たちまち私はこのマンガに肩入れし、「チエをやるのは私しかない！」とひとりで興奮し、芸能人の使命感に燃えてこの仕事をひきうけた。
　ずいぶん大袈裟だと思われるかもしれないが、久しぶりに大役をもらった芸能人は、たいていこんなふうになる。原作がとてつもなく面白かったのだから、なおさらだ。当然、こんな面白いものを描ける人って、どんな人だろうと思った。
　原作者はるき悦巳さんとは、もう録音を終えてしまった3月10日、雑誌『話の特集』のための対談（5月号掲載）で初めて会った。原作のイメージがこわれるような、変に気難しい人だったら困るなあ、と半分心配しながら対談に臨んだ。
　文は人なり、というけれど、マンガもやっぱり人、みたいだ。というより、文にせよマンガにせよ、「なるほど、この人にしてこの作品ありだ」と感じ入らせる作者は、誠実な仕事をしているのだと思う。つまり、自分自身の生き方から逃げない姿勢で、モノをかいているのだと思う。
　はるきさんとの対談は、とても楽しいものになった。どんなにエラクなっても金持ちになっても狂わないだろう、と思える人に出会うのは、嬉しいことだ。これも、アニメーションの声をやらせて頂いたおかげと感謝している。もうひとつ、はるきさんが20年前に大阪で『がめつい奴』の私を見たこと、そして『じゃりン子チエ』が生まれたのには、
「やっぱり、そのイメージが俺の中にずっと残ってたんとちゃうかな。強烈なイメージやったもんな」
　とはるきさん自身が言ったことも、とても嬉しかった。はるか昔の私の仕事が、チエを産む遠因になったとすれば、私はあらためて子役だったことを幸せに思う。

このユニークな声の出演陣は

◀中山千夏(チエ)

チエの役はこの人以外考えられない。芸能人・文筆・政治と多方面に活躍中。子役時代の「がめつい奴」テコの役は、チエに通じるものがあった。様々に変わるチエの表情・性格を見事に表わしている。

◀三林京子(ヨシエ)

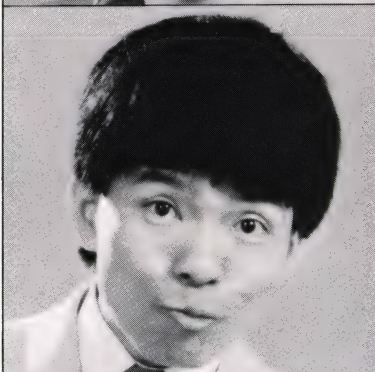
ＴＶや舞台で活躍している美人女優。小さい頃から芸事に親しみ、自然と身についた日本的な雰囲気を持っている。控え目なヨシ江はんを好演。

西川のりお(テツ)▶

関西ニュー・ウェーブ漫才コンビ。アクション漫才を得意とし、スピーディーなギャグを連発する。特にテツをやっている西川のりおのガラガラ声をネタにしたギャグが受けている。レコード「ＭＡＩＤＯ」も出している。

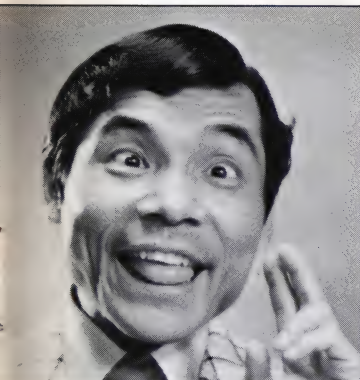
上方よしお(ミツル)▶

京唄子(おバア)▶

唄子の大口と啓助のアホぶりで知られるこのコンビは、関西漫才の大ベテラン。おバァとおジィと同じく、気が強い唄子、気弱な啓助という役柄で、しゃべくり漫才を見せてくれる。最近は唄啓劇団を作って芝居にも取りくんでいるが、才人として定評のある啓助は台本も書いている。

鳳啓助(おジイ)▶

関西喜劇界のベテラン、というだけでなく、幅広い役柄をこなす舞台人、として評価が高い。とぼけているようでけっこう繊細な社長にぴったり。

▼芦屋雁之助(社長)

MANZAI・アニメ・スペシャルだ！

◀笑福亭仁鶴
（花井拳骨）

上方落語界の実力派。独特のダミ声でまくしたてる迫力は、子供からお年寄りまで幅広い人気を集めている。ＴＶ等の出演も多い。

◀ザ・ぼんち
（カルメラ兄弟）

橋幸夫・ジャイアント馬場のものマネ、「そうなんてす川崎さん」で受けた人気コンビ。レコード「恋のボンチシート」も60万枚を突破。ノリまくっている。

仁鶴と人気を二分する上方落語のエース。落語家のイメージを破るスマートなカッコよさとセンスのよさで司会等にも抜群の定評がある。

▼桂三枝（花井渋）

▲オール阪神・巨人
（テツの仲間）

テンポのよいしゃべくり漫才を見せる。背の高い巨人、チビの阪神のコントラストが受ける。ネコゼ、ハトムネ、エクソシスト等、ギャグも豊富。

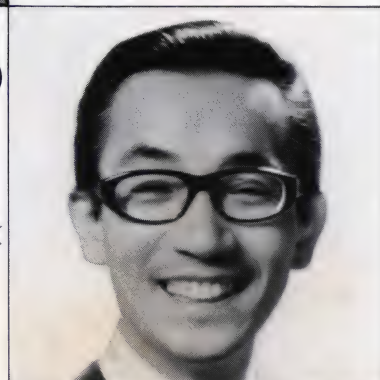
島田紳助（マサル）▶

ツッパリ漫才で人気の若手コンビ。ツッパリの紳介と気弱の竜介の役柄はマサルとシゲオの関係そのもの。映画「ガキ帝国」にも似たような役で出ている。暴走族や老人イビリのギャグが受けている。時には客とケンカする高座ぶりは、大阪のワル高校生そのまま。バンドも持っている。

松本竜介（シゲオ）▶

横山やすし▶
（アントニオ・ジュニア）

81年芸術祭優秀賞を受賞した名実共に関西を代表するナンバー・ワンのコンビ。攻撃型で天才肌のやすしと、それを受けるきよしの大らかでとぼけた味わいの組合わせは、アントニオ・ジュニアと小鉄そのものの、絶妙のコンビだ。ＴＶの司会も多数こなしている。

西川きよし（小鉄）▶

じゃりン子チエ〈主題歌〉

作詩／阿久悠●作曲／岡本一生●唄／ビジー・フォー

単細胞にも愛がある
単細胞にも陽が昇る
掛け算ばかりのこの世では
引き算する奴　美しい
ああゴキブリ　テラスで甲らぼし
ミミズがケチャップで厚化粧

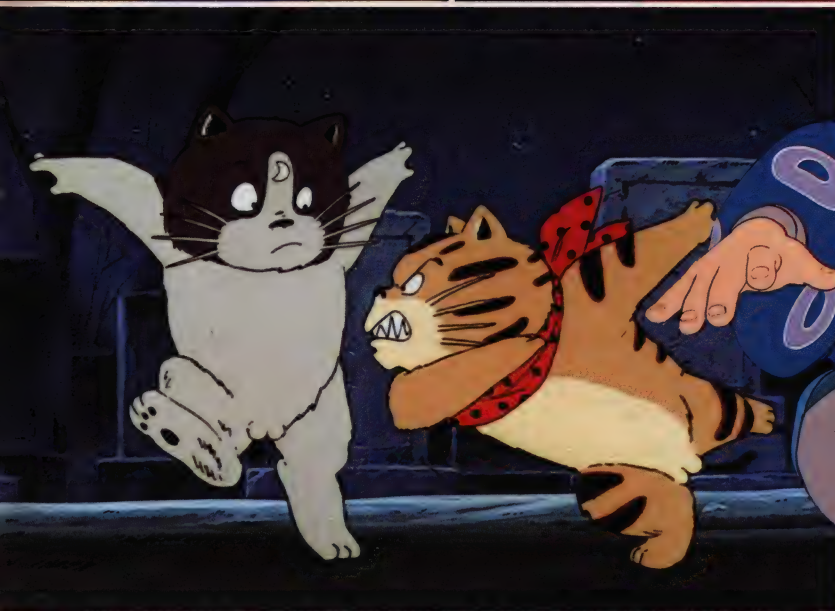
下駄が鳴る　下駄が鳴る　下駄が鳴る
明日は天気と下駄が鳴る
あかんで　あかんで　あかん　かんかん
かんかん　かんかん　下駄が鳴る

単細胞にも夢がある
単細胞にも明日がある
辛抱ばかりのこの世では
裸になる奴　美しい
ああ蛸八　ソースの風呂に入り
狸のマンションは毛むくじゃら

下駄が鳴る　下駄が鳴る　下駄が鳴る
明日は天気と下駄が鳴る
知らんで　知らんで　知らん　らんらん
らんらん　らんらん　下駄が鳴る

※　しゃらけ　じゃりんこ　じゃるパック
　　じゃれ猫　じゃらじゃら　じゃかましい

※くり返し

じゃらけ　じゃりんこ　じゃらり　じゃらじゃら
じゃれ猫　じゃらじゃら　じゃらじゃら
(くり返し)

役にも立たない大人たち

「じゃリン子チエ」の嘆息

村上　知彦

「じゃりン子チエ」を読んで泣かないヤツは人間ではないとすら思う。大阪弁の会話やネコの小鉄とジュニアが狂言廻しを演ずるユーモラスさから、何やらギャグまんがかユーモアまんがの一種のように受けとられているフシがあるが「じゃりン子チエ」の底を流れるものはペーソス以外のものではないように思う。

ペーソスとはお涙頂戴のことではない。実際「じゃりン子チエ」の登場人物たちは、だれもめったなことでは泣きそうもない。いつも明るく、元気いっぱいだ。その元気さ、明るさにこそ、ぼくらは涙を流すのだ。

ケンカやバクチに明け暮れ、毎日ブラブラ遊んでいるヤクザな父親・テツと、親に代わってホルモン屋をきりもりし、家出した母とテツの仲をとりもち、テツが巻き起こす事件の始末をつけてまわるチエちゃんとは、いわば漫才のボケとツッコミの関係に似ている。子どもの方が、親の性格を完全に読んでいて、適当に相手してやったり、うまく操ったり、先まわりしてやり込める愉快さが「じゃりン子チエ」の面白さの源泉になっている。テツに限らず「じゃりン子チエ」に登場する大人たちは、ケンカをさせるとテツ以上の迫力のおバアはん、テツの見えすいたウソにすぐだまされ、チエに「親の欲目や」とやっつけられるおジイさん、元遊興倶楽部の社長だったお好み焼き屋や、はじめこわもてムードで登場したチンピラ、ヤクザたちも、チエにかかるとたちまち気のいいオッサンになってしまう。単純で無邪気で楽天的、毎日が日曜日というか、遊ぶために生まれてきたような連中ばかりである。

そこへ行くと、チエをはじめとする子どもたちの方は、よほどしっかりしている。チエに意地悪したり、悪口を言ったり、何かとチエをかまうことに生きがいを感じているマサルは、そのことによって逆に、チエがいなくてはつまらない屈折した愛情を表現してしまっているし、どんくさいことに過大なコンプレックスを抱いているヒラメちゃんも、無神経な大人たちのせいでデリケートな心を痛めている悩み多き少女だ。彼らは、のん気な大人たちを鏡として、自分たちのこれからの人生を、よほど真剣に考えている。

ほんとうは、これが正しい姿なのかもしれない。どのみちロクなことを考えない大人たちは、しょーもないことばかり考えている方が罪がない。世のため人のためになることは子どもに任せておけばよいのである。

「じゃりン子チエ」の世界では、子どもの方が大人らしく、大人の方が子どもっぽい。そして、その子どもっぽい大人たちを眺めて、チエちゃんがふともらす嘆息「ウチは日本一不幸な少女や」が、「じゃりン子チエ」のペーソスを形作っている。

作者のはるき悦巳は1947年大阪生まれ。高校卒業後、上京して多摩美術大学卒。さまざまなアルバイトを転々とした後、78年3月、平凡パンチのまんが賞に「政・トラぶっとん音頭」で佳作入選してデビュー。現在、東京・豪徳寺の借家に奥さんと、昨年6月に誕生した長男と暮らしている。

東京暮らしがもう15年になろうというのに、はるき悦巳の話す言葉は、いまだに大阪弁である。アルバイト生活をしていた頃は、2ヵ月働いて、金がたまると2、3ヵ月ゴロゴロしているといった生活だったらしく、まんが家になったそもそもの動機というのが「家でなんかやって食えたらええなあ」というのと「どんなとこに住んでも、机一つと、ケント紙、ペン、墨汁があればできるから」というのだから、かなりのぐうたらにちがいない。

「じゃりン子チエ」の舞台になっている町は、はるき悦巳が生まれ、中学1年まで育った町でもある。通天閣界隈といえば、下町というのも上品すぎると思えるくらい、大阪らしいワイザツさに満ちた町だ。そこに住む人々の記憶、そこで育った体験が、はるき悦巳の性格を形作り「じゃりン子チエ」の中に反映している。

「じゃりン子チエ」の町は、ぐうたらがぐうたらのまま生きられる町である。役に立たないゴクツブシが愛される町である。ぐうたらのゴクツブシが、役に立たないことによって、人々の生活ペースから排除されるのではなく、かえってその最も基本的なペースを決定しているこの町は、人間が人間らしく生きられる、あるべきほんとうの町の姿のようにも思える。そして、そんなぐうたらたちに、「なんでみんなウチに頼むんや。大人の話やないか」とあきれながらも、彼らをしっかり支えてやっているのがチエちゃんなのだ。

チエちゃんのような女の子がいてくれたら、いつまでもぐうたらでいられるのにと、虫のいいことを考えているぼくも、役にも立たない大人たちの一人なのかもしれない。

フリテンくん

東宝・ナック提携作品

●'81年のニューヒーローはフリテンくん！

次々とヒット漫画を生み出し、今や四コマ漫画界のスターとなった植田まさしの代表作「フリテンくん」。鋭いギャグをとぼけたキャラクターに包んだフリテンくんがまきおこす笑いの洪水が、日本中のオモシロガリ屋・いたずら好きにバカ受けしている。世の中にこびることなく、必笑のいたずらを武器に毎日を楽しくオキラクに生きるフリテンくんの姿は、イライラいっぱいの現代人の不満解消にぴったり。

全国で２５０万部を売り、現在もなお爆発的売れ行きを誇示するこの原作のアニメ化を手がけるのは「火の鳥2772」('80）の杉山卓。声の出演には独自のロック活動を続けている近田春夫が、その軽妙なキャラクターを買われて初挑戦。

原　作■植田まさし（竹書房刊）
監　督■杉山　卓
声の出演■近田春夫
主題歌■中崎英也（WITH）キング・レコード

キミはこの笑撃に耐えられるか!?

●爆笑七番勝負　笑いすぎるアナタがこわい！

必殺ギャグをギュウギュウにつめこんだフリテンくんの爆笑七番勝負。あなた、受けて立つ自信ありますか？〝フリテン病〟の笑状は重いですからくれぐれもご用心下さい。

●「おとぼけカンパニー」

ここは会社の花の営業部。フリテンくんはスポーツ紙片手にタバコをふかしてマイペース。課長・係長にあいさつがわりに朝のいたずら。人気者の女子社員イクエちゃんにはやさしくしながらスカートめくり。今日もフリテンくん絶好調！

●「おとぼけ道中記」

なぜかフリテンくん、江戸時代にタイム・スリップ。バクチにケンカに大あばれ。得意のいたずらで、ヤクザもサムライも一刀両断。すっかり町の人気者。

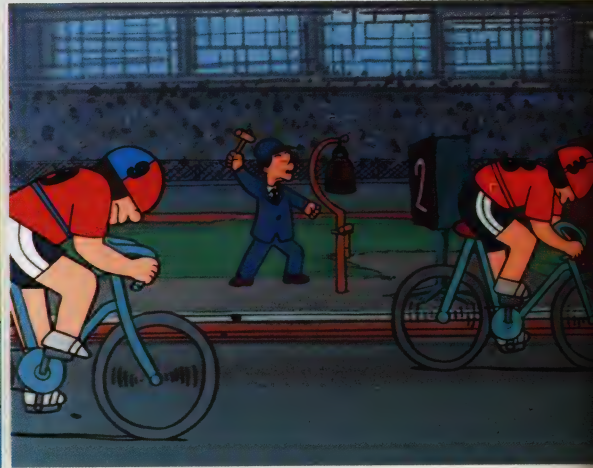
●「スポーツならおまかせ」

野球にジョギング、山登り。テニスにゴルフ、ボーリング。まじめなはずのスポーツもフリテンくんがやると全部おかしくなるからコワイ！

●「今日はふたりの噴火の日」

イクエちゃんが家の近くに住んでいることを知ったフリテンくん。さっそくデートを申し込む。食事にプレゼントに公園のベンチでの語らい。お決まりのデートコースもフリテンくんにかかればいたずらのフルコースに早変り！

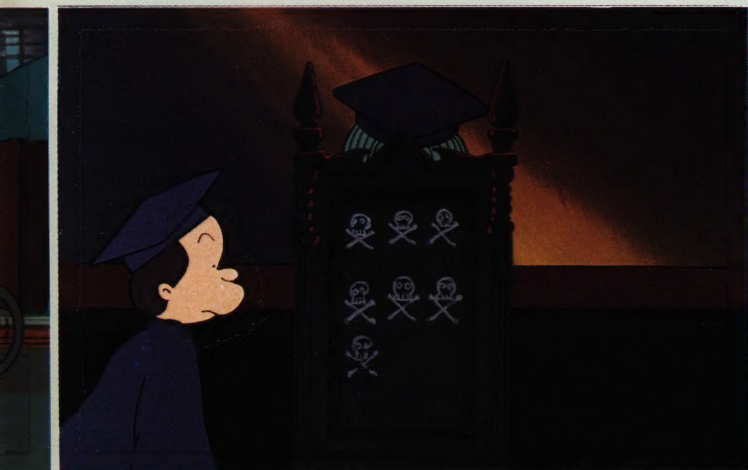
●「ハレのちハレーッ！」

偶然銀行強盗に出くわしたフリテンくんとイクエちゃん。なぜか札束の包みを抱いて、強盗に追われることになる。雪女、ドラキュラ、狼男もあらわれてもうメチャクチャの逃避行！

フリテン七番勝負!!

●「ギャンブル笑学校」

今日は絶好のギャンブル日和。花札・パチンコ・オートレース。ダイスに競輪、仕上げは競馬。勝ち運に見放された世の悩める人々に、フリテンくんが必勝法を伝受いたします。

●「雀狂時代」

世の中におもしろいものは数あれど、三度のメシよりやっぱりマージャン、という皆々様、お待たせしました。フリテンくん本領発揮のマージャンギャグ傑作集。あがるアホウに振りこむアホウ。同じアホならあがらにゃ損々。ほら、もうフリテンくんは得意のフリテンリーチをかけようとしてますよ!

しかし、アフレコは大変だった

近田春夫

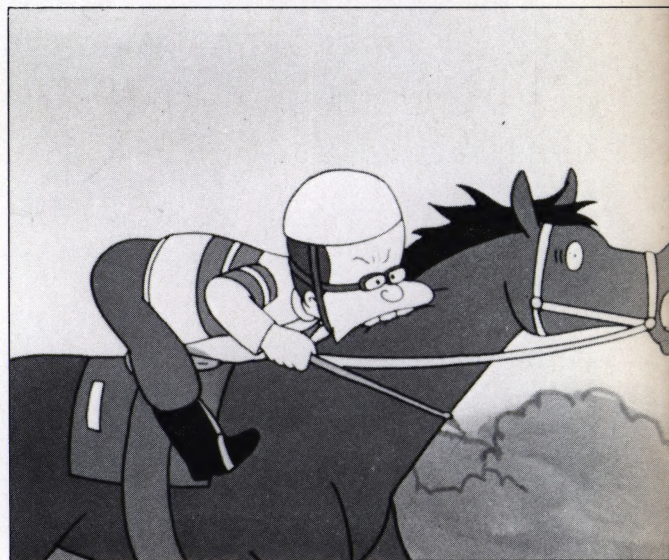
こういう文章ってのは書くときにいつもなやむんですよね。やっぱり人間ですから、インテリにみられたいとか。そういうミエってあるでしょ。ちゃんと漢字を沢山使って、固い文体で書ければ、それで問題もないんですけど、私の場合、どちらかと云うと、やわらかい文体を得意としてますし、漢字を用いる絶対量もかなり少ない。

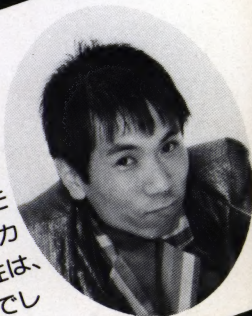
と、何行か「まくら」と称してかせいだりして本題に入ります。

フリテン君、と云うより植田さんのマンガを見ていると何故か昔の長谷川町子さんを想い出してしまう。絵の感じが似ていることも勿論だけれど、それ以上に、社会を見る作者の目の位置が近いように思えるのだ。

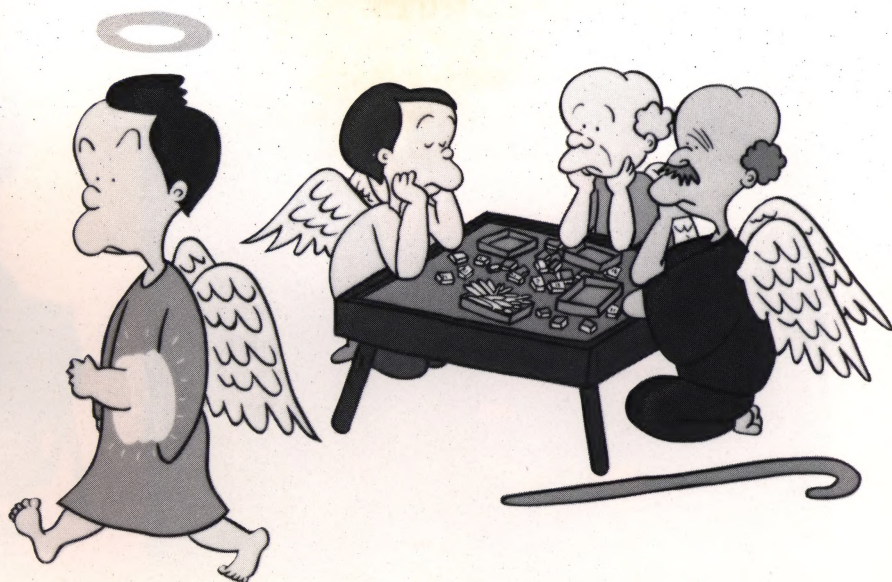
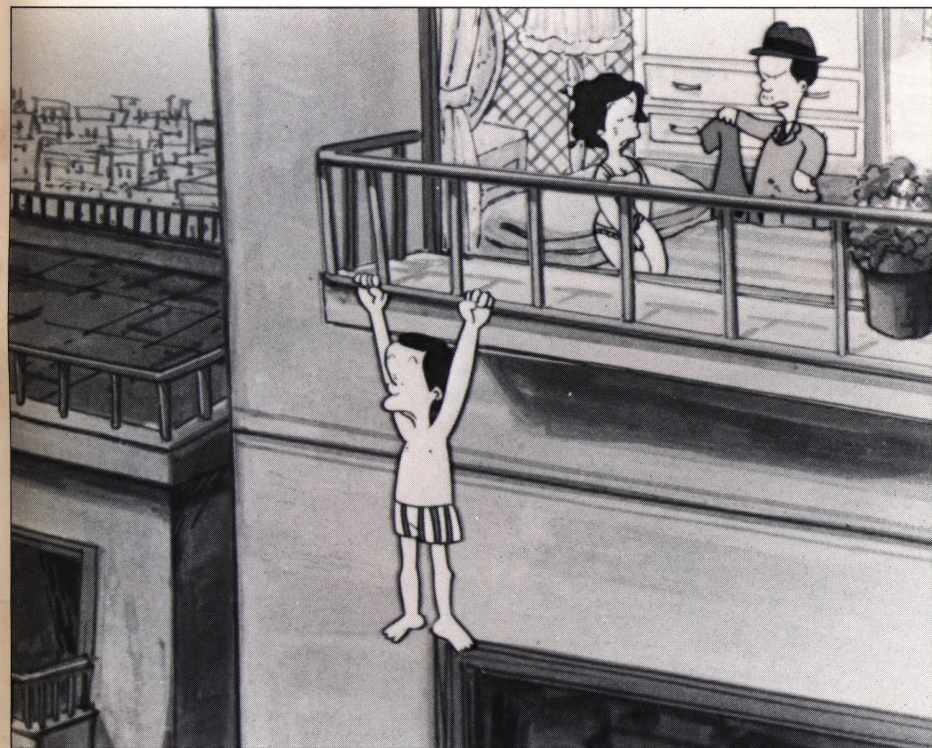
長谷川町子さんの作品に「いじわるばあさん」というのがあって、これを今読み返すと実にフリテン君的なのだ。主人公のばあさん（そう云えば、記憶に違いがなければ、映画化された時は青島幸男さんが役をやっていたように思う。）が、ヒマにまかせて、イジワルやイタズラをする、というコンセプトなのだが、そのイタズラやイジワルは、しかけられた方が文句の云いようのない、大袈裟に云うなら「順法精神」にみちみちたものなのである。

この「順法精神」にのっとったイジワル、これぐらい楽しいものはない、と私は思う。カリアゲ君がレストランに行って ボーイに「ノーネクタイお断り」とインギンに云われ、うしろ前逆に背中側にネクタイをして「してるよ」というストーリーがあった。うしろにしようが前にしようがネクタイをしていることに変りはない。なら文句は誰にもつけられないワケだ。

カリアゲ君は、たて前だらけの世の中で、もしかしたら、一人、本音で一生戦いつづけて行く、戦士なのかも知れないな、などと，一応まとめてみたんですけどいかがでしたか？しかし、アフレコは大変だった！

近田春夫プロフィール

51年2月25日生まれ。ロックアーチストであり、ヒカシュー、ジューシー・フルーツのプロデューサーであり、DJであり、コラム・評論もモノするマルチ人間。バカバカしく軽妙でいて頑固な個性は、現代を代表するユニークでしたたかなキャラクターだ。

原　作……………………植田　まさし
「月刊近代麻雀」
「月刊近代麻雀オリジナル」
「月刊ギャンブルパンチ」
©竹書房刊

企　画……………………馬場和夫
製　作……………………西野聖市
〃　………………………酒井知信
プロデューサー…………西條剋磨
脚　本……………………城山　昇
〃　………………………伊東恒久
〃　………………………山崎晴哉
〃　………………………杉山　卓
監　督……………………杉山　卓
音楽監修…………………松下治夫
キャラクターデザイン・総作画監督……三輪孝輝
作画監督…………………小林準治
〃　………………………高橋春男
〃　………………………森下圭介
美術監督…………………佐藤　信
色彩設定…………………矢野怜子
〃　………………………山之内直美
撮影監督…………………菅谷信行
編　集……………………辻井好子
〃　………………………吉田恵美子
録　音……………………太田克己
効　果……………………伊藤克己
助監督……………………岡迫和之
製作担当…………………戸井田博史
製作宣伝担当……………朝居利恵子

カラー・ビスタサイズ作品

定価　300円

昭和56年4月10日印刷
昭和56年4月11日発行

発行所　東京都千代田区有楽町1−2−1　東宝株式会社事業部
発行者　東京都千代田区有楽町1−2−1　大橋雄吉
印刷所　東京都港区芝2−1−28　成旺印刷株式会社

フリテンくん
長篇アニメーション映画